

研究班紹介

第2班 東アジアの租界とメディア空間

大里 浩秋 (非文字資料研究センター研究員／研究班代表)

第1期の「中国・韓国における旧日本租界」研究班の活動をふり返ると、シンポジウム（公開研究会）を3回開き、中国・韓国の研究者の参加を得て、旧租界の歴史や現状に関心を持つ人たちの前でこれまで続けてきた共同研究の成果を報告し、各自の租界に関する研究の中間報告を行った（詳細は本誌No.22、23、25を参照のこと）。それは、私たち非文字資料研究センターが目ざす世界に向けた情報の発信や研究交流拡大にとって大いに意義のあることであったが、その一方で、1年に1、2回のシンポジウムを開きその機会に論文をまとめるのが主たる活動となり、日常的な取り組み、資料収集と分析およびその活動を基礎とした研究会を開き、同様の関心を持つ研究者の報告やあるいは租界に住んだことのある人の体験を話してもらう会を開くことなど、COE時期には一部であれ行った活動がほぼできなかったことは反省材料である。

第2期には、従来の租界研究を継続しつつ、租界が存在した同時期に中国・朝鮮で出版された日本語の新聞・雑誌を取り上げて、現地で形成された日本人のメディア空間の実態を明らかにし、そうすることで一層日本が租界や租借地を経営した歴史や実情を知りたいと考えて、「東アジアの租界とメディア空間」と題する研究班を発足させたが、上記第1期の反省材料を忘れず、日常的な活動を積み重ねたいと考えている。

具体的には、関連資料の収集に努めながらその整理と読み合わせを行い、外部の研究者を招いての研究会を適宜開くこと、さらに、年に1、2回中国か韓国、および本学でシンポジウムを開き、その成果を公刊する。

以下、班のメンバーで取り組みたいと考えている課題を列記するならば、次のようになる。

・戦前の中国・朝鮮・日本に設置された租界（租借地・

- ・鉄道附属地を含む)、居留地の比較研究
- ・租界・居留地で発行された新聞・雑誌の研究
- ・租界で発行された画報や新聞、良友画報、北洋画報、キング、大陸新報、大東亜画報等に掲載されている図像資料の比較検討
- ・租界に代表されるモダン都市文化の研究

なお、第1期には数年来発表した論文をまとめて『中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産』（神奈川大学人文叢書27、御茶の水書房、2010年3月）を出版し、2011年春には、上記の本と2006年に出した『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』から数篇を選んで中国語に訳して、上海人民出版社から『租界研究新動態（歴史・建築）』と題する本を出版することができた（下に載せたのは、その表紙部分）が、第2期では着実に共同研究を展開することでこれらに続く成果報告書を公刊できればと考えている。

